

- ☒ 話すこと ☐ 書くこと ☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実 ☒ 授業での活用 ☐ 家庭学習での活用
☐ パフォーマンステストでの活用 ☐ 課外活動での活用

実践の
ポイント

AIによる壁打ちと対話活動で深まる実践的英語スピーキング授業の改善推進

実証概要

＜校数＞4校(小学校:3校、中学校:1校) ＜人数＞133名(小学校:71名、中学校:62名)
 ＜学年＞小学校:第6学年、中学校:第2学年 ＜アプリ等＞スクールAI(みんなぐ), AISATS(イーブランドラボ)
 ＜AI機能について＞スクールAI:授業中の英会話練習に使用。教育現場に特化したAIで、既存アプリから選択後すぐに使用できプロンプト作成や音声速度変更など用途に合わせてカスタマイズ可能。全児童生徒のログ記録、英会話終了後のフィードバック機能あり。AISATS:スピーキング評価測定に使用。バーチャルアバターとの対話で、「発音」「流暢さ」「課題達成度」をもとに総合的に評価。オリジナルスコアのほか、CEFRなどの公認試験の予測スコアを提供。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●小学校3校オンライン合同授業とAI活用による対話的英語学習の深化

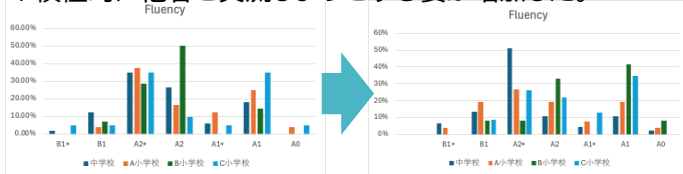
実践校3校をオンラインで接続し、「Who am I?」の単元のまとめとして合同授業を行った。事前学習では、Canvaを用いて動物の色や好きなもの、身体的特徴などを英語で表現したスライドを作成し、クイズ活動では「Who am I?」の表現を中心に、ヒントを工夫しながら英語で伝え合う姿が見られた。少人数グループの活用により、オンライン環境下でも児童同士が助け合い、拍手やサムズアップなど温かいリアクションを交わしながら活動に取り組んだ。AIを壁打ち相手として、事前に発音練習や表現確認を行ったことにより、児童が自信をもって発話することができた。これにより教師には、AIを前提とした活動設計や学習のつなぎを意識する新たな指導が求められる一方、対話を価値付け、安心して発話できる学習環境を整える指導の重要性が高まった。



実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

導入後、Fluency(流暢さ)はCERFに基づくA1からA2、A2からA2+に向上し、AIとの対話を通して発話の持続や積極的に他者と交流しようとする姿が増加した。



②児童生徒の関心・意欲の変化

AIとの対話により英語を話す不安が減り、自分のペースで挑戦する姿勢が育ち、実践的な交流場面において意欲的に参加する児童生徒が増えた。

③教師の指導の変化

AIが習熟度に応じた課題提示や誤りのフィードバック、発話量の可視化を担い、教師はそれをもとに個別支援に注力するなど、人とAIの役割分担を意識した指導へと変化した。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●ICT・AIを活用した外国語教育の充実と教師の専門性向上の工夫

教育におけるICT・AI活用に関する校内研修や資料の定期配布を行った。ICT・AIによるリアルタイムフィードバックの活用法を学び、①ICT・AIを活用し個に応じた「話すこと」の発話機会を増加し、児童生徒の英語発信力を向上させるとともに、②教師がICT・AIのデータを活用し、児童生徒一人ひとりに適した指導を行うためのノウハウを獲得した。



事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●対話型AIとネイティブALTの協働による英語学習の強化

AIとの対話により、児童生徒が英語で話すことへの心理的抵抗感が低下し、発音や表現の正確さを意識する姿勢が育まれた。本自治体では小中学校にネイティブのALTが常駐していることが特長であり、AIによる練習に対してALTが発音や表現の補足、励ましを行うことで、学習がより効果的に進められた。今後は対話型AIとALTの支援を一体的に位置付けた学習スタイルを当町の強みとして発展させ、教員・ALT双方の専門性向上を継続的に支援していきたい。

